「　農業への意味付け　」

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　三枝樹　明良

　私は渓流釣りが大好きだ。人の手が入っておらず、鳥や、魚、様々な木など豊かな生態系がはぐくまれている森。その中に流れる美しい渓流。誰もいない一人だけの世界で大自然と向き合い、ただひたすらに竿を振る。そこには人の目につかず、ひっそりと、でも懸命に生きる魚たちの姿がある。そしてそれらが循環し、亡くなった命がまた新しい命を生み出している。その循環に自分が加わり、魚たちと本気で勝負し、釣り上げその命を大切に頂く。その行為は自分にとってなくてはならないことだ。要は釣吉である。でも、もしその魚たちが人間の及ぼす問題によって、いなくなってしまったらと考えると居ても立っても居られない。生きているだけで自然に悪影響を与えてしまう私たちだが、少しでもこの地球に迷惑をかけないように生きたい。

私の実家は、岐阜県恵那市の山の中にあるまさにぽつんと一軒家である。築百年の古民家を改修し、三年前に両親と子供四人で長野県から移り住んだ。そこで自分たちでたべるものを自分で作る自給自足の生活をしている。私の父親は、子供の体のことを一番に考えてくれてはいるが、市販のお菓子を一切食べさせないなど、少しやりすぎではないかと思うほどのことまでしてくれる少し変わり者だと思う。煮炊きはガスなどは使わず、すべて冬の間に山から切り出してきた薪を使い調理している。野菜などはその年とれなかったら食べられない、スーパーなどで買うのは海産物くらいだ。冬から春先にかけては農産物が少ないので、戦時中のように、豆とカボチャ、大根しか毎日出てこないが、我が家では「飽きた」などという言葉は通用しない。トイレはもともと家にあった、きれいな水洗便所をぶっ壊しコンポストに人糞を入れ、春先に苗を育てるための温床として使うほどの徹底ぶりである。家にいるときは田んぼ、畑仕事から山仕事までたくさんのことやらされていた。そのため農作業が少し面倒くさかった。

しかし、愛農高校にきて自分からやることで自分で食べるものを自分で作るということの大切さや、面白さにも気付くことができた。そして、愛農で自由な時間などが増えたが、それでもなぜか室内で友達と遊ぶより、一人で畑仕事をしたり、釣りをしたくなってしまう。それだけ自分は自然に依存しており、自然によって成り立っているということが分かった。だからだろうか、私は農業というより自分の体を一から作ってくれた自然のことが大好きだ。だから僕は愛農に来たのだと思う。

でも、その私の大好きな自然が、生きていくために必要な自然が、生命が生きる上でいろいろな意味を成してくれていた自然が、どんどんと人の手によって壊されて行ってしまっている。自分にとっての自然は、生活の基盤を支えてくれているものであり自分を育ててくれた、なくてはならないものだ。それはたぶん誰にとってもそうだろう。私はまだ自然や生き物のことを一言で説明することはできないし、そもそも一言で説明できるものでもないと思う。でも私が思っているのは、人間は自然なしでは生きていけないということだ。

村上晋平さんの愛農農業の授業でこれからの農業のあり方や人間が自然から学ぶべき循環の仕組みを学んだ。それは、地球の生命は循環によって成り立っているということだ。生命は、循環していれば、半永久的に持続するが、長い年月の中で創られてきたそのサイクルが一度壊れてしまえば元に戻るのには時間がかかる。地球にとって最も大切な循環のシステムは自然の森である。自然の森はすべての再生可能エネルギーを無駄なく使い、人の手が加わらなければ循環し続け豊かな生態系が育まれている。木の循環や生き物たちも一種類では成り立たない。様々な動植物があるからこそどんな環境の変化にも対応できるのだ。

　人間が自然から学ぶべきことはたくさんあることを愛農で知った。すべてのことが循環していない今の社会のままでは、地球に限界が来て、生物の絶滅に先立って人間が絶滅してしまう危険性がかなり高いと思う。この今でさえも、食料問題や紛争、地球環境問題、人口問題など挙げたらきりがないほどの問題を抱えている。

もし、このまま循環という生物のおきてを無視するような生活を続けていたらこの地球はどうなってしまうのだろうか。私たちの子供の代まで地球がもってくれるかどうかも分からない。僕もそんなことを言われても実感がなかなかできないが。みなさんもそうだろう。私たちはそんな時代に生まれてきてしまったのだ。この問題は自分は関係ないと思っていても、結局自分の所へ帰ってきてしまう。正直平和といっていられるのもいつまでかは分からない。もしかしたらすぐかもしれないし、そうでないかもしれない。

でもこの地球で生きている一人一人がこの問題を自分のこととして真剣に受け止め、自然を壊さない、循環できる社会や生活とはどんなことかを考え動いていかないといけないだろう。私の親もただつらいことをさせるためだけにこんな生活をしているわけではなく、おそらく自分の子供やまた孫の生きていく地球のことを思いより良い生き方とは何かを考えこんな大変な生活をしてくれていたのだということを、親元から離れることで気付くことができた。

今、私たちは愛農で有機農業を学んでいるがこれも持続可能な循環するものの一つだ。これから私たちがやっていかなければいけない農業や職業もこのようなものだろう。私は将来やりたいことなどはまだしっかりとは、わからないが一人ひとりの行動は地球を悪い方向にも良い方向にも変えることができる力を持っていると思う。そのことを頭に入れ、ゆくゆくは森や川など自然を守ることのできる生き方をしていきたい。

　いまはこう思っているが私は結局、地球を救うには農業しかないのではないかと考えた。農業というか農を仕事にするのではなく、生き延びるための手段として自分の食べるものを作るということだ。食べるものを作るというのは、生きる上で最も基本的なことだ。みんながお金をかせぐことを考えず、地球のことを思いながら毎日生活していけたらどんなに幸せだろうと思う。

　でもそんなことは不可能だろう。ただのきれいごとになってしまう。全員はできないだろう。しかし、自分だけならできるかもしれない。というより、この時代に生まれてきた私たちは、このなくてはならない「地球」と「自然」を守るためにやらなくてはいけないことがある。この先人たちが受け継いできた「命のバトン」を次世代につないでいくということだ。

今日も私たちを生かしてくれているこの地球という母をこれ以上悲しませてはいけない。私はこの母なる大地にちょっとでも恩返しをするために。そして人類が命のバトンをつないでいくためにも農ということをやっていきたい。

　農業はそのためにあるのではないだろうか。

・・・とかっこをつけてみたが、本当はすべて私の大好きな川に生きる魚たちや、鳥たち、すべての自然を守っていくにはどうすればいいのかを考えただけなのだ。

これが釣吉というものである。